

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370400600		
法人名	医療社団法人聖和会		
事業所名	グリーンライフヴィラ荒尾		
所在地	熊本県荒尾市本井手1480-26		
自己評価作成日	令和元年11月27日	評価結果市町村報告日	令和2年2月3日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 九州評価機構
所在地	熊本市中央区神水2丁目5-22
訪問調査日	令和元年12月19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・入居者が、施設に入居することにより、何かを強いられたり、圧迫感を感じることがなく、自分のペースでゆったりとした生活を送ることができる。

・定期的な行事や、地域の催し物に参加する機会があり、入居以前の暮らしに近い生活を継続できるような支援を提供できる。

・敷地、建物は十分な面積があり、廊下やリビングは広々としており、開放的で穏やかな雰囲気がある。

・同一敷地内に併設してある小規模多機能施設とは綿密な連携を取っており、そこで行われる様々な慰問等の催し物に参加できる。かつ、ホーム内で阻害感を感じたり、不穏等で環境の変化が必要な際に、逃避先としての居場所にも活用できる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

住宅街の中、落ち着いた雰囲気を持つ事業所では、地域で暮らしてきた高齢者が穏やかにゆったりと一日を過ごす姿があります。事業所の中は安全に歩行が出来るように手作りに手すりが作られ、安全に配慮しながらも自立も大切にされている。訪問時には、食事作り、配膳、後片付け、そして午後からは夕食の買い物へと、それぞれの役割により生活の流れが出来ている様子がうかがえました。ケアの面では、入居者の安心・安全・自立支援のためにと職員で意見を出し合い、また理念に沿ったケアを振り返り実践する体制が整えられていました。入居者の穏やかな生活がこれからも継続できるような支援が続いていくことに期待します。

Ⅴ. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。〕

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念の内容については、職員や入居者家族の目につきやすい施設玄関に掲示してある。その内容は、事業所から家族へ、ケアの根本にあたる事を説明し、職員にも会議を通し、定期的に伝達している。	理念は事業所開設以来根付いたものであり、現在では理念に沿った年間目標を定め、毎月の会議で理念と年間目標の振返りを行い、議事録を配布することで職員間で共有している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	管理者が定期的に地域住民や、代表者、地域在住の入居者家族を訪問し、関係作りを行っている。また、地域行事への協賛など法人を通して行っているが、職員個々での交流は少ない。	管理者による地域・入居者家族等の訪問は継続されている。周辺は住宅街であるものの高齢化も進み、地域行事が減ってきているのが現状であるため、入居者と地域との付き合いは難しく、法人・事業所と地域との関わりが多くなっている。運営推進会議には地域代表の参加もある。	事業所が少し高台にある為、また周辺の地域状況から高齢化した地域である為、現状では隣接する同法人の小規模多機能事業所や家族との関わりを積極的に持つ様子がうかがえました。地域で行われている高齢者の集まり等の情報を見つけるなど、運営推進会議で情報収集などが出来ることを期待します。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	近所で認知症のある人やその家族困っている際の相談窓口は常時開放しているが、受身であることは否めない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議ではアットホームな雰囲気作りに成功しており、地域住民代表や行政職員から、様々な意見が気軽に出来るようになっている。	運営推進会議では日頃の活動内容や取り組み、評価を伝えている。入居者家族、住民代表、市職員等、参加者それぞれに意見を出し合っており、多様な意見交換の場となっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議を通じて市町村とは適宜連絡を取り合っているが、定期的であるとはいえない。	運営推進会議への参加で事業所の日頃の様子を伝えている。運営推進会議では報告等の他に意見を頂く機会ともなっており、また日頃の報告・相談、情報交換等により協力関係の構築に努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の勉強会を定期的に行い、職員間で共通認識を持つことで、身体拘束防止に取り組んでいる。	身体拘束をしないケアを前提として業務に臨んでいる。運営推進会議を利用して身体拘束に関する委員会を構成し、地域住民、家族等も含め事業所の姿勢を報告し、意見を得ている。	

グループホーム グリーンライフヴィラ荒尾

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	月例職員ミーティングにおいて、職員自身の対応が虐待になるのか、を話し合う場を重要視している。それを虐待防止に活かしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は既に学んでいるが、職員の関係研修参加は今のところない。職員により知識は様々であり、以降で研修参加を計画している状況。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	納得していただくよう説明後にも質問を受け付ける時間を設けている。また随時相談を受けることも可能であり、納得が得られない場合契約破棄も可能である。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時など日頃の様子を伝え将来のことも踏まえ意見や要望を引き出すようにしている。入居者は日常的に意見・要望を聞き運営に活かしている。必要時には家族会を開催している。	家族等の面会の際は職員からも声を掛け、意見が出やすい関係作りにも努めている。運営推進会議への家族の参加、家族会、誕生会への家族招待等、家族も来訪しやすい環境作りも行っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	会議前には懸案事項など、スタッフの意見を引き出すようにし、会議の場だけでなく日頃からのコミュニケーションも大切にしている。ミーティングではどのような意見でも圧迫されることがない。	管理者は日頃の業務を通じて、また職員会議で職員の意見を聞く機会としている。職員会議前には職員それぞれの意見把握のためペーパーの事前提出を旨とし、会議の迅速化や参加できない職員の意見を集約し、個々の意見を大切にしている。ケアに関する懸案事項については職員で意見を出し合い、「ケアの統一」を目指している。職員からの意見で業務手順変更や入居者の安全再確認等事例も聞かれた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人での研修、勉強会の機会を提供し、職員各自が独自に技能習得、知識習得向上できるよう条件を整備している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実践と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内人材育成研修が定期的に行われ、当該事業所職員も定期的な学びの場を得ているが、オンザジョブトレーニングは今のところ機能していない。		

グループホーム グリーンライフヴィラ荒尾

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他法人の参加する研修会や、同市内にあるグループホームや地域密着型施設が合同開催するグループホーム連絡会主催の勉強会などの参加を促している。		
Ⅱ 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期の段階で無理に関係作りを焦ってしまうと、かえって不信感を増強してしまうこともある。その為、自然な時間の流れと併せながらコミュニケーションをとり、不安や要望を引き出し、共感していく。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込みの前に、事業所の見学を強く勧めている。事業所の雰囲気と特色を理解された上で、入居の意思の有無を確認している。初期段階では、家族の不安や悩みなど、話を全て受け止め「聞く」姿勢を大事にしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居を決める段階で、本人や家族と面談し、本人が必要としている支援、提供できる支援を考慮した上で利用している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	お互いに一人の人間として尊重し合えるよう意識している。その為、家事などを共に行うことで、入居者・職員間で感謝の言葉が飛び交うこともある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人を支えるために、家族の理解と協力はなくてはならないものと捉え、特変ない場合であっても普段より連絡を取り合っている。面会時には居室で水入らずで過ごしていただくよう支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	行きつけへの散髪ややなじみの場へのドライブを行っている。昔なじみの知人の面会も定期的にある。	家族との関係継続を大切にしており、家族の協力を得ながら外出の機会もある。隣接する事業所とはイベントや行事での訪問もあり、ご近所のような付き合いもなっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士、人間関係においては一種の社会の縮図のようなものと考え、スタッフは無理に介入しないようにしているが、同時に怪我や事故などが発生しないよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用後も、継続的に電話連絡など行ったり、顔を出すようにしている。その為、サービス終了後も家族やその縁者から相談を受けたりすることもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常的に要望、希望をリスニングするようにしている。また、本人からの発言で要望があった際には日誌などにそのまま記載し、スタッフ間で情報の共有を図っている。その内容は家族にもお伝えしている。	職員は入居者との日頃の関わりや会話の中で希望・意向を把握している。入居者の希望・要望等は記録を残し、職員間で共有し、内容によっては計画にも反映する。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時にアセスメントシートである程度の情報を得ることができるが、入居後改めて本人や家族に入居前の生活や生活歴などを聞き、情報に深みを持たせていくようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	体調管理に努め、わずかな変化を見逃さないよう意識している。一人ひとりのADLをはじめ心身の状況に応じて日常生活の役割など支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居前より本人のケアのあり方について伺うようにしており、ホームでの暮らしに即した支援のあり方をケアプランに反映し、カンファやモニタリングで随時確認している。	毎月の職員会議を利用しモニタリングを行い、入居者の変化に対する対応等を検討している。特に変化がない時には半年に一度計画の見直しを行っている。急な見直しが必要な際には家族や医療機関等と検討し現状に即した介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日頃のかかわりや支援の中で、気づいたことや工夫があれば日誌やケア実施記録に記入している。それにより、全職員が情報を共有している。カンファレンスではその内容も含んだ話し合いが行われ、ケアプランに反映されている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	事業所の周知及び地域への認知症啓発の拠点としての機能を備えることを目的とした、地域参加型の勉強会などの開催も視野に入れている。		

グループホーム グリーンライフヴィラ荒尾

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居後も継続してなじみの人との関わりを継続することが出来るよう、地域資源の把握と、発掘は常に意識している。そのため、地域との関わりは密にし、常に新しい情報を得る努力をしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的に入居後も以前からのかかりつけの診察を受けることが出来るようにしている。必要に応じ、かかりつけ医へ電話相談、情報伝達など行い、適切な医療を受けることができる体制をとっている。	入居前からのかかりつけ医受診を支援している。協力医からの診察は往診で診察を受けることができ、その他の医療機関受診は家族の協力を得、場合によっては職員の通院介助を行う。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職には日常の健康状態を見てもらいながら、必要な医療的アドバイスをもらうようにしている。必要であれば訪問看護利用や医療機関の看護職に相談するようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院などの案件が発生した場合、すぐに介護サマリーやアセスメント票を提示できるようにしている。また、関係作りや、情報交換のため、入院時も職員が洗濯物対応し、医療従事者とのパイプを持つようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化やターミナルケアについての指針は入居時に書面で説明し、同意を頂くようにしている。また、家族の意思や考え方も変化していくものであるため、面会時などに状況説明し、指針に変更はないか適宜確認するようにしている。	入居時の説明及び実際にその時を迎えた時、都度都度の説明・話し合いにより入居者・家族が希望される場合は受け入れている。その際には家族や医療機関も含めた話し合いを重ね、連携を取りながら支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	現在、救急救命についての研修や勉強会に参加している実績は薄く、スタッフ個々の経験値や技術によるものが大きい。救急マニュアルや、訓練等の必要性を感じている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に一回、地域の消防団と合同で入居者の避難誘導訓練をしており、災害時に備えている。	年1回の事業所単体での訓練に加え、年1回は隣接する事業所と合同での避難誘導訓練を行っている。地域の消防団へは消防署を通じて連絡が届く体制となっており、地域との連携も取れている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉、口調だけでなく、その表情や声のトーンまで気かけながら、支援者の感情のあり方も意識して取り組んでいる。言葉での理解が難しいと判断される場合、ジェスチャーなど多用し、あくまで理解を得る努力を行う。	入居者への声掛け・口調や対応について職員間で意識しながらケアに臨んでいる。気になる点がみられた際には都度注意し合ってプライバシーに配慮したケアを行っている。	日々のその人らしい生活の一環としたものの支援の中に調理を一緒される姿を訪問の度に拝見し、入居者の活き活きとして昼食の準備をされている事に「何時までもお元気で」と職員さんと利用者に嬉しく思います。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	基本的に物事を問う再いくつか選択肢を用意し、選択していただくようにしている。 (メニュー等)問いかけに対しての返事が無い時は、表情や動き出しの有無などで、本人の意志を理解しようと努力している。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	時間に捉われず、決まりごとは極力作らないようにしている。健康面や環境で日々で変化する、入居者の気分や体調に沿って柔軟に対応できるようにしている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	家族の協力の元、本人の好みの衣類や化粧品などを身につけることが出来るよう支援している。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の好みや、本日のメニューなど、ゆったりしている時間などを利用してゆっくり聞き出している。食材の買出しや、準備、片付け、役割や楽しみを持ちながら、自然に生活リハビリとして取り入れることに成功している。	入居者の食べなれた食事を入居者・職員の手作りにより提供している。入居者の一日は生活そのものであり、職員の買い物への同行や食事作り、後片付けまで役割を持つ姿がある。数人ではあるが、出来ることを出来る範囲での関わりは日常的なものである。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事は野菜を中心に、入居者の食べやすい量と形状を考慮し提供している。水分補給も重視し行っているが、摂取量表など視覚化して確認できるものまでは活用していない。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自歯や義歯などの状態を定期的に確認している。毎食後の口腔ケアについては一部の入居者に実施提供している。			

グループホーム グリーンライフヴィラ荒尾

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	介助が必要な方であってもなるべくトイレでの排泄を支援している。また、オムツ対応にする場合も全体会議で慎重に協議し、移行するようにしている。	出来るだけトイレでの排泄を支援している。安易なオムツやパットの使用はせず、また使用の際にも日々の状態によりパットの大きさや費用面から検討を重ね、入居者それぞれの最善を考えたケアを行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎朝必ず発行乳製品を提供するようにしている。また、主食には雑穀を混ぜ、副食は野菜中心とし、食物繊維のものを意識して提供している。その他、主治医へ相談し、便秘の予防に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は2日に一度のペースで入れるようにしている。順番は決まっておらず、本人の希望が優先される。希望があれば毎日の入浴も可能である。	基本的に1日おきの入浴を基本としているが、希望により毎日の入浴も可能である。出来るだけ入居者の「出来ること」を大切にしたい支援を行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	休憩において、時間などを設けているわけではないため、入居者は思い思いの時間に好きな場所で休憩することが出来るよう、共有スペースのみならず、プライベートスペースの室温も配慮している。また、1人になれるスペースも確保している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医療機関に相談しながら必要最低限のものになるよう配慮している。そのため、受診往診時には、直近の情報をまとめて文書で情報提供している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居後は家事活動など本人ができることに着目し、く楽しみながら参加していただけることが、本人の喜びと残存能力保持に繋がると考えている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	本人の希望は常日頃から引き出そうとしている。家族面会時にその内容は伝達し、可能であれば家族支援の下外出できるよう配慮している。事業所で可能であるようならば、スタッフの支援で外出したり、外食に行くこともある。	入居者それぞれの体調等にもよるが、職員の日々の買い物への同行や通院を利用した外出等を支援している。計画行事によるショッピングや見学ドライブ等もある。家族の協力による外出も見られる。	入居者それぞれの身体状況や意欲が異なってきた様子もうかがえました。入居者の「行きたい」の気持ちが生活の中で叶うような支援に期待します。

グループホーム グリーンライフヴィラ荒尾

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭トラブルなどのリスクが高いため、基本的に家族の了解の元、事業所預かりとなっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	離れている家族や知人に会えるよう支援したり、電話できるように支援している。また、家族から離れてしまったのでは、と不安の強い入居者に対しては、連絡ノートを利用し、家族を近くに感じてもらえるよう工夫している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	家庭的な雰囲気を維持するため、プライベートスペースには基本的に何でも個人のものを持ち込めるようになっている。共有スペースには季節を感じられるような飾り付けを行い、また、過剰な光の刺激や音の刺激がないよう、常にカーテンで調光したり、TVのボリューム調節など行っている。	共用スペースには入居者が思い思いに過ごすことができるスペースも用意されている。廊下には手作りの手すりを設置したり、椅子を配置したりと工夫されている。リビングは調光、ボリューム、加湿に気をつけており、穏やかに生活できるよう配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居室や共有スペースで、気の合う入居者同士で過ごせるよう支援している。また、ホーム内随所に一人になれるように椅子を設置している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者のアルバムや寝具、調度品など使い慣れたものを使用していただくようにしている。仏壇などを持ち込み、以前より信仰のある宗教を継続していけるような配慮もなされている。	ベッド、押入れ、洗面台が備え付けられた居室は、手芸品や仏壇等が持ち込まれている。入居時には管理者から家族へ「もとの生活のまま」を大切にしている旨伝えている。各居室には加湿器を貸し出し、湿度にも配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自作の簡易式手すりなど設置し、自立支援を意識した環境作りを工夫している。		

2 目 標 達 成 計 画

事業所名 グリーンライフヴィラ荒尾

作成日 令和2年 2月 3日

【目標達成計画】

優先 順位	項目 番号	現状における 問題点、課題	目 標	目標達成に向けた 具体的な取り組み内容	目標達成に 要する期間
1	2	地域に高齢者住民が多いが、接点が少ない。	近隣住民にとって、介護等の相談窓口や駆け込み寺として機能する。	近隣住民の集まり（サロン等）の情報を運営推進会議で収集し、積極的に関わりを持つ。	2年
2	49	入居者が気軽に外出できる機会が少ない。	体調を考慮しながらも、入居者の「行きたい」という意欲を引き出し、その気持ちを実現できる環境にする。	コミュニケーションにおいて、行きたい場所などを聞き出す。身体的・時候的に実現可能であれば、日程を決め、実現していく。理念に照らし、職員に必要性を伝え全体で定期的かつ恒常的なものになるよう取り組む。	2年
3					
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。